

目的意識をもって生活する力を育む生活単元学習 — 単元「かいものにでかけよう」の実践を通して —

濱田万里代 [鹿児島大学教育学部附属特別支援学校]

小久保博幸 [鹿児島大学教育学系 (教職大学院)]

Life unit learning that fosters the ability to live with a sense of purpose:

Practice of the unit "Let's go shopping"

HAMADA Mariyo and KOKUBO Hiroyuki

キーワード：特別支援学校、知的障害、生活単元学習、合わせた指導、買物学習、目的意識

1. はじめに

本稿では、特別支援学校（知的障害）で行われている生活単元学習についての考え方や、小学部における単元「かいものにでかけよう」の実践事例についてまとめる。そこから得られた成果と課題を整理し、新学習指導要領下の、目的意識をもって生活する力を育むための指導の在り方を検討する。

2. 生活単元学習の現状

2.1. 各教科等を合わせた指導（以下、合わせた指導）について

合わせた指導とは、知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校において、各教科等（各教科、道徳科、外国語活動、特別活動及び自立活動）の一部又は全部を合わせて行う指導の形態のことである。児童生徒の実態が様々な学習集団においても、自然な生活の流れや、より適切な時期の中で、生活経験や既習事項などを基に、自立や社会参加への願いや思いを大切にしながら、一人一人の日常生活の充実や生活上の課題の解決を目指して、各教科等で育成を目指す資質・能力を実際的・総合的に培っていくことが可能であるため、従前から日常生活の指導、生活単元学習、遊びの指導、作業学習などとして実践されている。本校では日常生活の指導と生活単元学習を全学部において、作業学習を中学部と高等部において設定して指導を行っている。小学部段階では、遊びを学習活動の中で効果的に設定し、身体活動の活発化や仲間との関わりなど心身の発達を促していくこと、中学部、高等部段階では、「産業現場等における実習」を含め、社会生活への適応性や、将来の職業生活を見据えて基盤となる力を育んでいくこととしている。

合わせた指導については、学校教育法施行規則第130条第2項において、「知的障害者である児童若しくは生徒又は複数の種類の障害を併せ有する児童若しくは生徒を教育する場合において特に必要があるときは、各教科、道徳科、外国語活動、特別活動及び自立活動の全部又は一部につい

て、合わせて授業を行うことができる。」と法的な根拠が示されているが、「合わせて授業を行うことができる」と学校の裁量を規定したものとなっており、教科等を合わせて指導することが前提にはなっていないことに留意する必要がある。小学校等と同様に、各教科や領域等ごとに指導することを前提としつつ、各教科等の教育内容の十分な学びを確保する上で、「どのように学ぶか」を検討した際に、「特に必要がある」と「各特別支援学校が」判断した場合、合わせて授業を行うことを「選択」する。

今回の改訂では、各教科等を合わせて指導を行う場合においても、各教科等の目標を達成するために、育成を目指す資質・能力を明確にした上で、効果的に実施していくことができるようにカリキュラム・マネジメントの視点に基づいて計画－実施－評価－改善していくことの必要性が述べられている（特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部），P30）。各教科等を合わせた指導を行う場合には、各教科の目標・内容に基づき、児童生徒の知的障害の状態や生活年齢、学習状況、経験等に基づいた実態把握、具体的な指導内容・指導目標設定、学習評価を行う必要がある。特に、合わせた指導においては、どの教科等のどの資質・能力を合わせたのか、特別支援学校学習指導要領に示す各教科の目標、内容に照らした上でその関連性を明確にしておくとともに、関連する教科の目標・内容を踏まえて設定した指導内容について、目標に準拠した評価を行うことが大切である。このような基本的な考え方を踏まえて、単元の目標や内容により指導の形態を効果的に選択していくことなどもカリキュラム・マネジメントの役割の一つであると考えられる。

2.2. 生活単元学習について

生活単元学習は、児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的・体系的に経験することによって、自立や社会参加のために必要な事柄を実際の・総合的に学習できるようにするものであり、広範囲に各教科等の目標や内容を含めて単元を構成し、個別の指導計画に基づき計画・実施する。単に教科等の内容を合わせて指導するというのではなく、あくまでも生活の文脈（生活の流れやまとまり）に基づいて計画・展開し、具体的経験の組織化による生活力の育成が大きくねらうところである。

指導に当たっては、児童生徒の実態、興味・関心を踏まえ、個人差の大きい集団の中においても一人一人の児童生徒が見通しをもって力を発揮し、活動に協働して取り組むことができるようにすること、個別の指導計画で明らかになった教育的ニーズや指導目標を生かしながら、生活に密着し、児童生徒の興味・関心に基づいた学習活動を準備し、それらを展開していく中で満足感や成就感といった自己実現の喜びを味わうことができるようにすること、目標意識や課題意識を育てる活動を含んだものであること、各教科等に係る見方・考え方を生かしたり、働かせたりすることができるようにすることが大切である。

本校の小学部においては、新学習指導要領下の教育課程を編成するにあたって、学習指導要領に示されている各教科等の指導内容を教科別の時間に指導するのか、それとも合わせた指導の中で行

うのか、内容ごとに検討を行った。児童の生活を中心に置き、生活科の内容と、国語や算数など各教科の中から、生活の文脈に沿って指導をすることが効果的であると考えられる内容とを組み合わせ、生活単元学習の設定を行っている。

3. 実践 単元「かいものにでかけよう」（令和元年12月実施）

3.1. 学級の実態

本学級は、小学部中学年の、男子4人、女子1人、計5人の児童で構成されている。児童たちは前年度までに「自分が欲しいおやつやおもちゃを1個選んで買う」、「保護者から頼まれた家庭で使うもののお遣いをする」という形での買物学習を行ってきた。おやつやおもちゃは、児童にとって「食べる」、「遊ぶ」という目的が明確であり、買物について学ぶための意欲付けとしては効果的であった。保護者から頼まれたお遣いについては、直接自分のものにはならなくても、大好きな保護者から頼まれることで、児童が使命感をもって取り組む姿や「ありがとう。」と感謝をされることのよさを感じる姿につながった。

本単元以前の買物に関しての実態としては、買物をするには「お金」が必要なことや、金銭を使ったやり取りのおおよその流れを知っていて、教師と一緒に買物ができるという状態であった。理解している数については、1、2程度から100までと、個人差が大きく、算数の学習では、おおよそ1段階、2段階、3段階の3グループに分かれて学習を行っていた。

それまでの学校生活においても、校外学習に関しては、緊張しつつも意欲的な児童が多く、「店に行く」ということ自体を楽しみにする姿が多かった。しかし、店舗に行くと毎回自分の欲しいものを買おうとする、買ったものをすぐに使いたがる、支払いの際に、金種に限らず1枚のみをトレーに出したり、逆に財布に入っている硬貨すべてをトレーに出したりするなど、買物の目的や金銭の価値という点においては理解が不十分であったり、限定的であったりすると考えられた。

3.2. 指導する教科等の内容

本単元では、先述したとおり、児童生徒の生活文脈に沿って、各教科等の内容を組み合わせ編成した年間指導計画に基づいて指導を行った。本単元「かいものにでかけよう」は、児童の生活にとってどのような意味があるだろうか。それ以前の学習経験としては、6月に行った「お店に行って〇〇を買う」学習において、公共交通機関・施設の利用や安全な道路歩行について学んでいること、10月の身の回りのことや手伝い、集団での過ごし方などを学ぶ学習の中で、食事のために必要なものを買いに行く経験をしていることなどから、本単元直前の児童の様子としては、教師や友達と一緒に「お店」に行った経験があり、「買物」についておおよその見通しをもっているという状態であると考えられた。

また、本単元は2学期最後の単元であり、児童はその後冬休みを迎えることになる。年末から年始にかけての児童の生活を考えると、「お年玉」など金銭を取り扱う機会が増えることで、金銭への関心が高まり、自分で買物をしてみたいという意欲につながりやすい時期であると考えられる。冬休み直前に、「金銭の扱い」や「きまり」など買物に関する学習をすることで、児童にとっ

では、身に付けたことをより生活に生かしやすく、「やってみよう。」「できる気がする。」「できた。」などの期待感や達成感を十分に感じることができると考えた。

以上のことを踏まえ、本単元では、表1に示す各教科等の内容について指導を行うこととした(表1)。

表1 「かいものにでかけよう」で指導する各教科等の内容

	指導内容	1段階	2段階	3段階
生活科	役割		<ul style="list-style-type: none"> 簡単な係活動などの役割について知ること【知・技】 身近な集団活動に参加し、簡単な係活動をしようとする【思・判・表】 	<ul style="list-style-type: none"> 集団の中での簡単な役割を果たすための知識や技能を身に付けること【知・技】 様々な集団活動に進んで参加し、簡単な役割を果たそうとする【思・判・表】
生活科	金銭の扱い	<ul style="list-style-type: none"> 金銭の扱い方などに関心をもつこと【知・技】 身の回りの生活の中で、教師と一緒に金銭を扱おうとする【思・判・表】 	<ul style="list-style-type: none"> 金銭の扱い方などを知ること【知・技】 身近な生活の中で、教師に援助を求めながら買い物し、金銭の大切さや必要性に気付く【思・判・表】 	<ul style="list-style-type: none"> 金銭の扱い方などの知識や技能を身に付けること【知・技】 日常生活の中で、金銭の価値が分かり扱いに慣れる【思・判・表】
生活科	きまり	<ul style="list-style-type: none"> 簡単なきまりについて関心をもつこと【知・技】 身の回りの簡単なきまりに従って教師と一緒に行動しようとする【思・判・表】 	<ul style="list-style-type: none"> 簡単なきまりについて知ること【知・技】 身近で簡単なきまりやマナーに気づき、それらを守って行動しようとする【思・判・表】 	<ul style="list-style-type: none"> 簡単なきまりやマナーに関する知識や技能を身に付けること【知・技】 日常生活の簡単なきまりやマナーが分かり、それらを守って行動しようとする【思・判・表】
算数科	図形	<ul style="list-style-type: none"> ものともとの関係に注意を向け、ものの属性に気づき、関心をもって対応しながら、表現する仕方を見つけ出し、日常生活で生かす【思・判・表】 		
国語科	聞くこと 話すこと		<ul style="list-style-type: none"> 挨拶をしたり、簡単な台詞などを表現したりすること【思・判・表】 	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶や電話の受け答えなど、決まった言い方を使う【思・判・表】 相手に伝わるよう、発声や声の大きさに気を付ける【思・判・表】 考えを止め【思・判・表】
国語科	読むこと			<ul style="list-style-type: none"> 日常生活に必要な看板や文、看板などを読み、必要な物を選んだり行動したり【思・判・表】

3.3. 授業で目指す児童の姿

先述したとおり、本学級の児童は1段階に該当する児童も、2段階から3段階に入ろうとしている児童も在籍しており、言葉や数の理解に関しての実態差が大きかった。しかしながら、学習への意欲や、これまでの生活経験から身に付けていることという視点で考えると、必ずしも1段階の児童に対する支援の方が大きいとは言えない部分もあり、児童同士がお互いの姿から学び合うことで、それぞれの課題により意欲的に取り組むことができるとも考えられた。

また、担任として本学級で大切にしたいと考えていたことは「自分のことは自分でする」、「役割意識・責任感をもつ」であった。これらは、学級の教育目標の具体策にも織り込んで、年間を通して指導を行ってきたことであり、本実践を行った12月は、学校の中で学んできたことを、店舗という地域社会の中で発揮する機会として、適した時期であると考えた。本単元の中で想定できる「自分のことは自分でする」、「役割意識・責任感をもつ」の具体的な姿を表2に示す(表2)。

表2 学級で大切にしたいことと、本単元で想定できる姿

	自分のことは自分でする	役割意識・責任感をもつ
本単元で想定する児童の姿	<ul style="list-style-type: none"> これまでの経験をもとに、「できるかも」という思いをもち「やってみよう」と取り組む姿 困ったときの解決方法を考えようとする姿 必要な助けを求めようとする姿 どうしたらできるのかを知り、自分でやってみようとする姿 	<ul style="list-style-type: none"> これまでの「できた」という経験をもとに、「任せて」と主体的に取り組む姿 「ありがとう」と感謝される良さを感じる姿 身近な誰かのために何かをしようとする姿 自分だけではなく、自分を含む集団のみんなのために何かをしようとする姿

表3 本単元で目指す児童の姿

㊦	作ったメモや手順表を手掛かりにしながら品物を探し、挨拶や支払い、商品の受渡しをする姿
㊧	品物の数が増えると必要な硬貨の枚数が増えることを理解し、品数に応じて十円、百円の硬貨を準備する姿
㊨	欲しい物を買うために自分の言葉や買物メモを使って店の人に伝えようとしたり、頼まれた相手やみんなの目的のために、必要な買物をしようとしたりする姿

本実践では、表1に示した2段階の部分为核心にして、児童の実態に応じて1段階、3段階の部分を取り入れていく形で、指導する各教科等の内容を整理した。そこに担任として学級で大切にしたいことを併せて、授業で目指す児童の姿を設定した(表3)。

授業者としては、金銭の価値に注目することができる学習や、児童が買物や金銭の必要性、価値を実感できる設定、教材、そして児童の「やってみよう」、「できた」を引き出す設定、教材を工夫していきたいと考えた。

3.4. 取組の実際

3.4.1. 第一次「おつかいをしよう」

第一次「おつかいをしよう」では、校内の身近な職員が困っている様子を知り、職員が欲しがっている物を児童が近所の百円ショップに買いに行き届けるという活動をゴールとして設定した。百円ショップを選んだ理由は、売っている商品は110円か108円の物が多く、「百円硬貨1枚と十円硬貨1枚があれば、1個の商品を買うことができる」ということが、児童にとって金銭の価値を感じるきっかけとなるのではないかと考えたからである。第一次の主な学習活動の流れは表4のとおりである。

導入としての第一時では、児童の好きなキャラクターなどが困っているという物語を設定し、イラストや写真を用い、音声を加えて作成したスライドをテレビモニターに表示して、「欲しいもの」、「欲しい数」に注目することができるような学習を設定した。児童が見聞きした情報を「かいものメモボード」に整理し、それを手掛かりにして、教室内に設定されたお店コーナーで具体物を探し、必要な個数をかごに入れるという活動を行った。児童はモニター上のイラストや流れる音声に注目し、品物や数をつぶやいたり、絵カードを指さしたりする姿が見られた。依頼に合った物、数を見付けることができた場合、キャラクターから「ありがとう。」と言われるスライドを表示したところ、笑顔で喜んだり、ガッツポーズやハイタッチをしたりするなど、喜ぶ様子が見られた。

表4 第一次の学習活動と単元で目指す児童の姿との関連

	主な学習活動	単元で目指す児童の姿との関連
1	過去の学習の写真や動画を手掛かりにして経験を想起し、買物の手順や挨拶を考える	㉗
2	依頼動画を見て、依頼者、品物、個数を把握する	㉗
3	品物カードを貼ったり、文字で書いたりして、買物メモを作る	㉗㉘
4	品物カードに応じて硬貨カードを貼ったり、手本とマッチングしたりして、硬貨を準備する	㉘
5	買物メモを手掛かりにして、店内で品物を探し、購入する	㉗㉘
6	依頼者に品物を届ける	㉗
7	買物場面の動画を見て、行動や挨拶を自己評価したり、友達や教師からの他者評価を聞いたりする	㉗
8	お礼の動画を見聞さず	㉗

第一時の姿から、指示された物を表す絵カードを選ぶことや、それを模擬店で買うということの課題理解は全員ができたと考えられたことから、第二時以降は、改めて、これまでの買物学習の経験を基に、買物場面で必要な挨拶ややり取りをまとめ(写真1)、それらを使って、キャラクターなどから依頼された品物を、模擬店で買うという活動を行った。買物に必要なやり取りをまとめる活動の中で、児童の中から「お金がいる。」という発言を引き出し、「じゅうえん(十円硬貨)」、「ひゃくえん(百円硬貨)」という金種の学びへつなげた。金種を学んだ上で、品物を1個買うためには、百円硬貨1枚、十円硬貨1枚が必要であることを提示し、「かいものメモボード」の品物カードの下に、硬貨カードを貼ることとした(写真2)。



写真1 買物の手順



写真2 買物メモ



写真3 買物メモ



写真4 品物を届ける様子

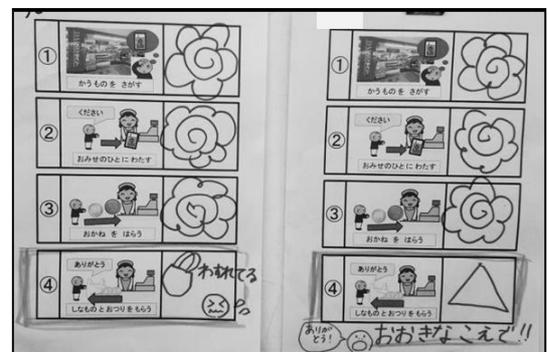


写真5 振り返りで用いたワークシート

学習を繰り返す中で、児童によっては硬貨カードの上に実際の硬貨を置き、マッチングする形で硬貨を準備したり、硬貨カードを使う中で考え方を理解し、品物カードの下に直接硬貨を置いて準備をしたりすることができるようになった。日頃の国語、算数で3段階相当の学習をしている児童

については、買物メモを自分で記入する形にしていたが、品物1個に十円硬貨と百円硬貨が1枚ずつという考え方が難しい場面があったため、別なホワイトボードに枠を作り、自分で品物と硬貨を対応させて準備することができるようにした（写真3）。

第一次のまとめとしては、校内の職員からの依頼動画を見聞きして買物メモを作り、必要な硬貨を準備して百円ショップに買物に行き、品物を依頼主に届けた（写真4）。また、買物場面の動画を見て、ワークシート（写真5）を使って自己評価・他者評価を行った。第一次における買物場面での児童の様子と評価、課題を表5にまとめる。

表5 買物場面での様子と評価、課題

	依頼主	購入した物(個数)	買物、依頼主に届ける際の様子	評価・次の課題
A児	学部主事	学部玄関に飾る正月飾り(1個)	<ul style="list-style-type: none"> 買物メモの写真を指さして自分が探している物を教師や友達に伝える。 友達と一緒に店内を歩き、正月飾りのコーナーを見付けると声を出して指さし、商品を手にとって探す。 喃語やお辞儀で店員に挨拶をし、財布の硬貨を全て出して支払う。お礼も伝える。 「せんせい」と呼んで走り寄り、笑顔で品物を渡し抱きつく(日頃抱きつくことはなかった)。 	挨拶・支払い◎ 買物メモの使い方◎ ↓ 次は友達と協力して品物を探すと良いのではないか
B児	教頭	職員室で使う磁石(2セット)	<ul style="list-style-type: none"> 買物メモの写真を指さし磁石を見付けるが、写真と同じ色の磁石がなかったことに戸惑い、教師を呼ぶ。 教師と一緒に同じ色の磁石を見付け、2セット数えてかごに入れる。 教師の見守りを受けながら、品物や金銭のやり取りをして、教師と一緒に「ありがとう」を伝える。 職員室で教頭を探し、磁石を渡す。教頭が磁石でプリントを貼る姿を確認してから外に出る。担任と笑顔でハイタッチ。 	挨拶△ 支払い◎ 買物メモの使い方○ ↓ 挨拶を相手に聞こえる声で
C児	副校長	仕事に使う三色ボールペン(1本)	<ul style="list-style-type: none"> 買物メモを見ながら「三色ボールペン」と言葉にして伝え、自分で売り場を探そうとする。友達が店員に尋ねて黒のボールペンを探すのを見聞きして、その近くを探し、パッケージの表記を見て品物を見付ける。 教師の見守りを受けながら「ください。」と伝え、財布から硬貨を出して支払う。シートを財布に入れるまで自分でするも、品物を受け取り忘れ、店員に呼ばれ、担任の表情を見て、慌てて取りに戻る。 「三色ボールペン、買いました。はいどうぞ。」と副校長に渡す。「ありがとう。」と言われ大喜びで戻ってくる。 	挨拶・支払い△ 買物メモの使い方◎ ↓ 品物を持ち帰る(自分で意識できるように)
D児	事務職員	事務室で使う黒のボールペン(1本)	<ul style="list-style-type: none"> 「困ってるって言ったもんね。」「黒のペンがいるって言ったよね。」と依頼主と依頼されたものについて繰り返し担任に伝える。 売り場を見付けられず、担任に「ない。」と伝える。担任の「どうしたらいいかな。」の言葉に応じて、店員に買物メモを見せ、自分なりの言葉で説明する。 自分でやり取りをしながら支払いや受渡しをするが、挨拶が小声。 事務室にペンを届け、「もう書けるよ。」と伝える。「先生、喜んでた。ありがとうって言った。」と嬉しそうに担任に伝える。 	挨拶・支払い○ 買物メモの使い方◎ ↓ 挨拶をもう少し大きな声で(本人が動画を見て気付く)
E児	養護教諭	マスク(3箱)	<ul style="list-style-type: none"> 買物メモ見て、「マスク」と言葉にしながらか教師と店内を回る。マスク売り場を見付けると自分で、メモの写真と同じマスクを選び、3個持って歩き始める。 レジでは、教師と一緒に「お願いします。」「ありがとうございました。」の挨拶をする。自分で財布から硬貨を出し、コイントレイに置く。 教師と一緒に保健室にマスクを届ける(養護教諭不在⇒後日お礼を言われる)。 	挨拶・支払い○ 買物メモの使い方◎ ↓ 買う物の種類を複数にし、個数も増やす

第一次の学習を通して、児童たちがそれぞれ、身近な職員のことを意識して、お遣いに取り組む姿や、お礼を言われて喜んだり、役割を達成して安心したりする姿が見られた。教科等の指導内容である金銭の扱いや、挨拶、やり取りについては、実際の買物場面を動画で振り返ることで、児童の中から「(品物を)忘れていた。しまった。」「(僕は)できた。」「もっと大きな声で挨拶した方が良かったかも。」など、自分や友達の姿を評価する姿が見られた。評価に用いたワークシートは、それぞれの児童のものを縮小コピーして、第二次の買物メモの裏面に貼って使うことにした。

3.4.2. 第二次「お楽しみ会をしよう」

第二次では、本実践をした時期が2学期末であったことも加味し、「お楽しみ会」を目的とした買物学習に取り組んだ。ここでは、児童のこれまでの経験や教師が提示するイラストを手掛かりにして、「お楽しみ会」に必要な物を自分たちで考え、買物メモを作り、買物に行くという活動を設定した。第一次から続いて買物の場所を百元ショップにすることで、品物の個数が増えると必要な硬貨の数が増えることを理解できるように意図した。また、実態に応じて、それぞれが買う品物の個数を第一次の買物より増やすことで、それぞれがステップアップした課題に取り組むことができるようにした。第二次の主な学習活動の流れは表6のとおりである。

表6 第二次の学習活動と単元で目指す児童の姿との関連

	主な学習活動	単元で目指す児童の姿との関連
1	お楽しみ会をすることを知り、使う物や食べたい物を自分たちで買えばよいことに気付く	㊦
2	お楽しみ会に必要な物を考え、買う担当を決める	㊦
3	買う物を確認するための画像(音声付き)を見聞きして、買物メモを作る	㊦㊧
4	買物メモの品数に応じて硬貨を準備する	㊧
5	買物メモを手掛かりにして、店内で品物を探し、購入する ※ 第一次の振り返りワークシートを持参し、反省を生かすことができるようにする	㊦㊧
6	動画や写真を見て、買物手順や挨拶の自己評価、他者評価をする	㊦
7	お楽しみ会をする	㊦

第一時では、お楽しみ会をすることを教師から聞くと、喜ぶ児童が多かったが、お楽しみ会で何をするのか尋ねると、言葉につまる様子であった。あらかじめ用意していたスライド教材で、イラストを示したところ、それを手掛かりにして、「おやつを食べたい。」「ジュース(を飲みたい)。」「これ(イラスト)みたいに、頭にかぶりたい(三角帽子)。」など、言葉や身振りで伝える姿につながった。これまでの学習経験としては、教師が活動を提示したり、児童が選択肢の中から選んだりすることが多かったために、「お楽しみ会」という言葉だけでは、楽しそうだという感じは分かっても、具体的な活動を想起するには至らなかった、または自分たちで考えるということの理解が難しかったのだと考えた。その後、教師の「あれ、でも教室にはお菓子が無いな。どうしようか。ジュースもないね。」などの言葉に対しては、「お店に行けばいい。」「買物。」などの言葉や、学習カレンダーに貼ってある店の写真を指さす姿での反応があったことから、手掛かりによって必要な物を想起することができれば、それを入手する手段をして「買物」があることへの理解はできていると考えられた。改めて、今回の学習を通して、少しずつ、「自分たちで考えて準備をする」、
「目的のために手段を使う」ということ実感できるのではないかと考えた。

買物メモの作成や硬貨の準備については、第一次同様に行い、百元ショップに買物に行った。買物メモについては、児童の実態に応じて、数字の表示をしたり、品物をイラストではなく実物の写真で表示したりした(写真6, 写真7)。学習のまとめとしては、児童が買ってきた品物を使って、学級のお楽しみ会を行った(写真8)。第二次における買物場面での児童の様子と評価、今後の取組で大事にしたいことを表7(次頁)にまとめる。



写真6 買物メモ



写真7 買物メモ



写真8 お楽しみ会の様子

表7 買物場面での様子と評価、今後の取組について

	購入した物(個数)	買物, お楽しみ会までの様子	評価・今後の取組について
A 児	紙皿 (2パック)	<ul style="list-style-type: none"> 買物メモを持ち、友達と一緒に店の中を探して回る。途中で友達に買物メモを見せ、友達の「手伝ってってこと？」の言葉に対して「うん。」と答えた。 友達に呼ばれて紙皿コーナーを見付けると大喜びで、紙皿を手に取り、教師と一緒に「1, 2。」と言葉にしながらかごに品物を入れた。 喃語やお辞儀で店員に挨拶やお礼をし、財布の硬貨を全て出して支払う。 教師の「お皿買ってきてくれた人。」の問いに対して、元気よく「はい。」と答える。 	挨拶・支払い◎ 買物メモの使い方◎ ↓ 買物メモを使ったり、目的のために買物をしたりする経験を更に積み重ねる
B 児	紙コップ (2パック)	<ul style="list-style-type: none"> 買物メモとかごを持ち、友達と一緒に店の中を探して回る。多数の商品の中から見付けることが難しく、友達に助けを求める(教師と一緒に「手伝って。」)。 買物メモの写真と同じ紙コップを見付けると、自分で2パック取ってかごに入れ、ほっとした表情で担任とハイタッチ。 教師の見守りを受けながら、品物や金銭のやり取りをする。教師がワークシートのイラストを指さして伝えると、自分なりの大きな声で「ありがとうございます。」を伝える。 教師の「紙コップどこたっけ。」の言葉に応じて、紙コップを持ってくる。包装を開けて、紙コップを並べて準備をする。 	挨拶○ 支払い◎ 買物メモの使い方○ ↓ ・買物メモを使ったり、目的のために買物をしたりする経験を更に積み重ねる ・買物メモのは写真であることで同じ物を選んでいるが、イラストだとどうなるか
C 児	ジュース (3本)	<ul style="list-style-type: none"> 買物メモを持ってジュース売り場を探し、「1, 2, 3本。」と言葉にしながらかごに入れる。(家庭では課題であると聞いていた)DVDを欲しがったり、DVD売り場から動かない、という姿は見られなかった。 教師の見守りを受けながら「お願いします。」と伝え、財布から硬貨を1枚ずつ出して支払う。品物まで受け取り、「できた。」と教師に伝える。 教師の「誰かジュース入れるの手伝ってくれる。」の言葉を聞いて急いで近寄り、ジュースを紙コップにつぎ分ける。 	挨拶○ 支払い○ 買物メモの使い方◎ ↓ 今後、100までの数を学習したら、より細かい硬貨の数え方、レジでの出し方の指導をしたい
D 児	三角帽子 (1本)	<ul style="list-style-type: none"> 買物メモを持って店内を回るが見付けられず、自分から「お店の人に聞く。」と言って店員に話し掛ける。買物メモを見せ、「帽子はありますか。」と尋ねる。 振り返りで使ったワークシートを見て、「今度は大きな声で言うから見ててね。」と教師に伝え、品物の受渡しや支払い、挨拶をする。 「みんなで使うために買って来たから私が配りたい。」と、自ら三角帽子を友達に配ろうとする。 	挨拶・支払い○ 買物メモの使い方◎ ↓ 挨拶をもう少し大きな声で(本人が動画を見て気付く)
E 児	お菓子 (4個)	<ul style="list-style-type: none"> 買物メモを見て、選んでいた4個の写真と同じ菓子を自分で探してし、かごに入れる。 教師と一緒にレジに行く。品物や金銭の受渡しは自分で行き、教師と一緒に「お願いします。」や「ありがとうございました。」を伝える。 教師の「おやつを買ってきてくれた人。」の問いに対して、「はい。」と答える。 	挨拶・支払い○ 買物メモの使い方◎ ↓ 写真の買物メモがあることで、他の商品を触りすぎることなく、買物ができそう

第二次の学習を通して、児童が買物メモを自分で使って品物を探したり、買う物を理解した上で、友達に協力を依頼したり、店の人に尋ねたりする姿が見られた。レジでの品物や金銭の受渡しについても、第一次で振り返りに用いたワークシートを見返したり、教師と一緒に確認したりすることで、それぞれの課題に注目する姿が見られた。

3.5. 児童の変容

買物メモを作って買物に行くことを通して、自分の欲しい物やその場で見付けたお菓子やおも

ちやに気を取られすぎることなく、自分が買うべきものを探したり、探すために誰かに助けを求めたりする姿、依頼主に品物を届けたり、「ありがとう。」と言われたりして喜ぶ姿、お楽しみ会の中で、「これは私が買ったよ。」とうれしそうに教師に伝える姿などが見られるようになった。また、学級での生活の中で少しずつではあるが、「〇〇さん、手伝ってくれる？」や「誰か手伝ってくれる人はいないかな。」という教師の依頼に対して自分から手を挙げたり、自分から行動を始めたりする姿が増えつつあると感じる。「ありがとう。」と伝えると笑顔になったり、ハイタッチをしたりするなど、喜びを感じている様子も見られる。自分が困った場面での、「手伝って。」や「〇〇を教えてください。」という言葉も、少しずつではあるが、自分から、または教師と一緒に言葉や身振りで伝えることができるようになってきた。

3.6. 実践の考察

買物学習は、児童にとって魅力的な活動であるとともに、金種の理解や店の人との金銭を使ったやり取りに必要性が生まれ、児童が意欲的に取り組むことで、自己評価や他者評価にもつながる。児童にとって学ぶことを明確にすれば、自己評価や他者評価、改善・工夫という内容にもつながりやすく、児童にとって目的意識をもって生活をする力を育むことができると考える。

また、誰のために買うか、買う品物と個数、必要な硬貨をまとめた買物メモは、児童が必要な情報を理解するため、また実際の買物場面において自分で確かめたり、店の人に支援を求めたりするために有効であった。これは、家庭生活にも生かすことができるものであると考える。

金銭の価値に関して、店を百円ショップに限定し、十円、百円硬貨の枚数で金銭の価値を捉えることを意図したが、あくまでも限定場面であると感じた。より「金銭の価値」の理解を深めるには、更に教材研究が必要であると考えた。

4. 成果と課題

4.1. 成果

- 目的意識をもって生活する力を育むための学習として、買物の有効性を感じることができた。
- 教科等の内容の指導と併せて、学級で大事にしたいことを組み込んで授業を計画したことで、合わせた指導として各教科等の内容を組み合わせるということに加えて、カリキュラム・マネジメントにおける、学校、学部、学級、それぞれの教育目標のつながりを意識した授業の在り方を考えることができた。

4.2. 課題

- 「金銭の価値」について、授業計画時の、児童が「金銭の価値を理解する、実感する」という姿のイメージが曖昧であった。「お金があれば買物ができる」という理解はできている児童に対して、更に金銭の価値の理解を深めることを考えると、数の理解が1～2程度、1～10程度という実態においては、どのように価値を意味付けしたらよいのか、今後も教材研究に努めたい。

5. 参考文献

文部科学省（2018），特別支援学校学習指導要領解説 各教科編（小学部・中学部）

丹野哲也（2017），特集 学習指導容量等の改訂Ⅰ 各論4 知的障害のある児童生徒に対する教育課程の充実について，特別支援教育 No.65，東洋館出版社

一木 薫（2017），特別支援学校（知的障害）における教科別・領域別指導と各教科等を合わせた指導，「特別支援教育の実践情報」PLUS 平成29年版 学習指導要領改訂のポイント 特別支援学校，明治図書

肥後祥治・雲井未歆・片岡美華，鹿児島大学教育学部附属特別支援学校（2013），特別支援教育の学習指導案と授業研究ー子どもが学ぶ楽しさを味わえる授業づくりー，ジヤース教育新社

肥後祥治・雲井未歆・廣瀬真琴，鹿児島大学教育学部附属特別支援学校（2020），子どもの学びからはじめる特別支援教育のカリキュラム・マネジメントー児童生徒の資質・能力を育む授業づくりー，ジヤース教育新社